

The Japanese Onco-Cardiology Society

日本腫瘍循環器学会

会報

2025/7

No.6

目次

● 理事長挨拶	1
● JOCS/IC-OS Japan Chapter Webinar	2
● 第8回（2025年）学術集会開催のお知らせ	3
● 第7回（2024年）学術集会開催のご報告	5
● 学会報告	
【総務】	
2025年度（第8期）定時社員総会兼評議員会議事録.....	6
【国際交流】	
第7回日本腫瘍循環器学会を終えて	8
GCOS2024@Minneapolis	9
ESC Cardio-Oncology 2025 を終えて	10
【国内交流】	
腫瘍循環器学的重要性と実態：小室班研究を踏まえて —日本臨床腫瘍学会 2025 特別企画報告—	11
● 施設紹介	
新潟県立がんセンター	12
● 役員名簿	
● 編集後記	



一般社団法人
日本腫瘍循環器学会
<http://j-onco-cardiology.or.jp>

理事長挨拶

一般社団法人 日本腫瘍循環器学会
理事長 南 博信
(神戸大学大学院医学研究科腫瘍・血液内科)

最近開発されている抗悪性腫瘍薬のほとんどが分子標的薬です。アントラサイクリン系薬物の心毒性は、1970年代から知られ今でも問題となっていますが、分子標的薬は殺細胞性抗がん薬よりも心血管障害のリスクが大きいことが知られています。EGFR遺伝子変異を有する肺癌に対してゲフィチニブなどの第一世代のチロシンキナーゼよりも、オシメルチニブが高い有効性を示し標準治療として使用されてきました。そのオシメルチニブよりも、EGFRとMETに対する二重特性モノクローナル抗体であるアミバンタマブと変異型EGFR阻害薬のラゼルチニブの併用が、無増悪生存期間を延長させることが示され、日本の実地診療でも2025年5月より使用されるようになりました。しかし、この併用療法は37%に静脈血栓塞栓症をおこします。しかも6%が重篤な肺塞栓症です。血栓塞栓症を防ぐためにDOACを予防投与する必要がありますが、その用法・用量は従来のものとは異なります。しかし、用法・用量の詳細は当該のDOACの添付文書には記載されず、アミバンタマブやラゼルチニブの添付文書を読まないと分かりません。血栓を治療する医師も抗悪性腫瘍薬の情報に自らアクセスすることが必要な時代となったわけです。腫瘍循環器診療の重要性が増していると言えます。

アミバンタマブとラゼルチニブの併用療法で使用するDOACの薬物動態には民族差があります。今回は主に海外データで用法・用量が決められましたが、それが日本人に適切であるか、日本人でも安全に使えるかどうかは不明です。今後、日本の臨床研究で明らかにする必要があります。また、アミバンタマブもラゼルチニブも単剤ではそれほど静脈血栓塞栓症を起こさないのに、なぜ併用すると急増するのか、その機序も分かっていません。基礎研究が必要です。

このように腫瘍循環器領域に解決すべき臨床的課題は山積しています。新規抗悪性腫瘍薬が次々と開発されるのに伴い、課題はさらに増えています。我が国の腫瘍循環器学を発展させなければいけません。日本腫瘍循環器学会が2017年に発足した時の会員数は384名でしたが、2025年7月は正会員が824名、準会員が91名まで増えました。着実に大きくなっていますが、これを加速する必要があります。ぜひ、皆さんの周囲の方に声をかけていただき、学会の発展のためにご協力いただければ幸いです。

JOCS/IC-OS Japan Chapter Webinar

日本腫瘍循環器学会(JOCS)では、広報委員会の取りまとめによるWebサイトにおいて、教育研修委員会による「教育webセミナー」が、腫瘍専門家と循環器専門家のバランスがとれた主要コンテンツの一つとしてJOCS会員の人気を集めてきたところです。
<https://j-onco-cardiology.or.jp/webmovie-content/>

・教育Webセミナーから国際連携へ

このたび、2024年度より国際腫瘍循環器学会(IC-OS)との連携による IC-OS Japan Chapter (ICOJ)の活動を兼ねる形で「JOCS/ICOJ webinar」が追加されることとなりました。これは、教育研修委員会と国際交流委員会の連携による、将来的な国際連携を視野に入れた新たな取り組みです。

・JOCS/ICOJ Webinarの特徴とテーマ

本Webinarは、腫瘍循環器学に関わる多職種の専門家向け、最新の知見や診療戦略をわかりやすく紹介することを目的に、年4回以上の開催を予定しています。テーマは「がん薬物療法概論」、「殺細胞性抗がん薬」、「分子標的治療薬と心毒性」、「免疫関連有害事象としての心筋障害」、「がん治療関連心筋障害の早期発見」、および「がん関連血栓症」など多岐にわたります。文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」との共催による海外演者の英語講演もあります。

過去のアーカイブ動画はJOCS公式サイト(<https://j-onco-cardiology.or.jp/meeting/jocs-ic-os-webinar/>)から、会員・非会員を問わずどなたでも無料で視聴可能です。現場の診療にすぐに役立つ知識を、職種を超えて共有する場として好評を得ています。

・ICOJの設置とGCOS日本開催への展望

ちなみにICOJとは JOCSとIC-OSを繋ぐ窓口で、2023年12月に国際交流委員会の下に設置されました。ICOJの設置は国際腫瘍循環器サミットの日本開催 (GCOS2027@Tokyo) に向けた必要条件であり、ICOJ には年4回以上のWebinar開催が義務付けられています。

JOCS会員は無料でICOJメンバーに登録いただけます。詳細については[こちら](https://forms.gle/hB1Uf1BhiY8RDP479) (<https://forms.gle/hB1Uf1BhiY8RDP479>) をご参照ください。

JOCS/ICOJ webinar の背景には、現時点では国内外の各学会に幅広く分散している腫瘍循環器学において、IC-OS連携やGCOS2027日本開催を通じてJOCSとしての求心力を高めることで、将来を担う若手会員による国際共同研究への参画や診療ガイドラインの国際ハーモナイゼーション活動等を通じた国際的な腫瘍循環器学の発展へと繋がるという期待が込められています。



・謝辞

JOCS/ICOJ webinarの作成に際し、教育研修委員会（泉知里委員長、田尻和子幹事）の皆様および各演者の先生方に変にお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

執筆者： 佐瀬 一洋

順天堂大学大学院医学研究科臨床薬理学

〒113-8421 東京都文京区本郷 2-1-1

E-mail: sase@juntendo.ac.jp

第8回日本腫瘍循環器学会学術集会開催のお知らせ

会期： 2025年10月25日（土）～26日（日）
会場： 千里ライフサイエンスセンター
会長： 向井 幹夫（大阪がん循環器病予防センター 循環器病検診部 副所長）
実行委員長： 赤澤 宏（東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学 講師）

ごあいさつ

このたび第8回日本腫瘍循環器学会学術集会を2025年10月24日（土）・25日（日）の2日間、大阪府豊中市の千里ライフサイエンスセンターにおいて開催させていただくことになりました。腫瘍循環器学は、2017年10月に日本腫瘍循環器学会が設立され以来、新しい学際領域の学問として注目を集めており2023年には本学会より診療ガイドラインを刊行されました。しかしながら、がん治療の進歩は非常に早く新しい治療薬が登場する一方で新たな心血管毒性が出現することから、腫瘍循環器学外では常にエキスパートオピニオンによる対応が続いています。さらに、アントラサイクリン心筋症やがん関連血栓症などにおいてもがん治療が進み患者さんの予後が改善するにつれ新たな課題が出現しています。そこで、第8回日本腫瘍循環器学会学術集会のテーマを「Continuity and Change 不易流行：古くて新しい腫瘍循環器学」として腫瘍循環器学を様々な見地から議論する場といたしました。

最も古い抗がん剤であるアントラサイクリン系抗がん剤は、新たに乳がんトリプルネガティブ症例に対する免疫チェックポイント阻害薬と共に投与されることから注目を集めています。分子標的薬はさらに新しい標的に対する薬剤が開発されておりがん治療は大きく変化しています。これらの古くて新しい抗がん剤に対してそれぞれのセッションで最新の情報をもとに議論いただきます。適応が拡大し多くの症例で投与されるようになった免疫チェックポイント阻害薬やCAR-T細胞療法など免疫療法是臓器横断的な合併症への対応が必要です。そして、循環器

領域では免疫関連炎症性心筋炎に加え慢性期に認める非炎症性心不全症例や血管炎などの多彩な合併症が注目されるようになっていきます。ここでは、がん免疫療法ガイドライン第3版以降の新たなエビデンスを加えた討論をお願いしています。

ガイドラインといえば、肺血栓塞栓症・深部静脈血栓症および肺高血圧症に関するガイドラインが2025年3月に改訂されました。がん関連血栓症は、腫瘍循環器領域では最も頻度が高く重要な心血管毒性の一つですが、本ガイドラインでも詳しく記載されています。本学会でも複数のセッションにおいて幅広い見地から議論していただきます。さらに



2025高血圧治療ガイドラインにも「がん患者」の項目が追加されています。そこで、会長企画として新たな学際領域に注目しています。腫瘍高血圧学は新しく改訂された高血圧治療ガイドラインや新しいエビデンスについて議論がなされます。そして、動脈血栓症も含めた腫瘍脳卒中学、さらに高齢化する本邦で注目される腫瘍老年学をそれぞれのパイオニアの先生に議論していただきます。

海外招聘講演はKazuaki Negishi先生 (The University of Sydney, Sydney, Australia)にお願いいたしました。CTRCDの基準に深く関わった研究者として日本人が腫瘍循環器学の発展に重要な役割を果たした先生にご講演いただきます。そして今回の学会の一つの目玉としてソノグラファーとのセッションを準備いたしておりますが、ここでも基調講演をいただく予定です。腫瘍循環器外来で重要

な役割を担っていただいているメディカルスタッフの皆様と交流していただければと考えています。

学会開催の1週間前2025年10月19日(日)に大阪国際がんセンターにおいて本学会では初めての企画として「がんサバイバーの晩期合併症」をテーマとして討論する市民公開講演会を開催いたします。本学会をアカデミアのみならず、医療関連企業、行政および患者そして市民の皆様が一体となって成功させたいと考えています。なお、10月25日には1970年万博時に開業し、本年度で幕を閉じる予定の伝統ある千里阪急ホテルで懇親会を開催いたします。今回のテーマの通り新旧万博を経験した大阪での開催です。皆様、奮ってご参加ください。

第8回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
向井 幹夫
(大阪がん循環器病予防センター 副所長)

第7回学術集会開催のご報告

2024年8月3～4日に第7回日本腫瘍循環器学会学術集会を姫路で開始させていただきました。がん専門病院でがん薬物治療に専門的に携わるようになった30年前に、アントラサイクリンの心毒性の対応に一人で苦労していた頃を思い起こすと、循環器の先生と日本腫瘍循環器学会の学術集会を担当させていただけたことは、私にとって望外の喜びでした。猛暑の中での開催となりましたが、560名の方に姫路までお越しいただきました。海外講師として米国からUCSFのJavid Moslehi先生とミネソタ大学のAnne Blaes先生を招請しました。Moslehi先生には免疫チェックポイント阻害薬による心筋炎、Blaes先生にはがんサバイバーの心血管障害について、ご講演をいただき活発な討論ができました。試みとして参加者各自のスマートフォンを用いた自動翻訳システムを導入しました。驚いたのは日本語のセッションでMoslehi先生が突然質問に立ち、英語での確かな質問やコメントをしました。自動翻訳システムが機能していることに我ながら驚きました。数年前に利用したシステムは全然使い物にならなかっただけに、テクノロジーの進歩に驚きました。我々も負けずに進歩しなければいけないと感じたのは私だけでしょうか？海外の研究者に姫路までお越しただけただけで、直接交流することができました。このような機会をとらえて、共同研究や若い研究者の留学につながることを祈っています。

お二人の海外招請講演に加えて、会長講演で私の腫瘍循環器学に対する思いを述べさせていただく機会をいただきました。さらに、3つのシンポジウム、7つのミニシンポジウム、6つの教育セッション、2つの委員会企画、3つのスポンサードシンポ

ジウムに加えてPAPシンポジウムで64題の指定講演を発表いただき、一般公演では50題、ポスター発表では39題と多くの討議を行っていただきました。実りある議論が交わされたものと思います。

学術集会の参加者は毎年増えています。今年の参加者のうち医師は半分弱の264名でした。4名の初期研修医と11名の学生の参加があったのは、うれしく思いました。どんどん若い医師、学生が参加して将来、腫瘍循環器学を目指してくれればと思います。医師以外のメディカルスタッフのうち6割が薬剤師さんでした。腫瘍循環器診療では超音波検査が重要ですので興味をもっている臨床検査技師の方が多いのではないかと思います。今年は13名の臨床検査技師の方に参加いただきましたが、今後、働きかけていく必要があるものと考えています。

循環器学と腫瘍学の知を融合することにより新しい成果を創造することを目指し、学術集会のテーマを「知の融合から創造へ」としました。22の企画での活発な討論を通じて「知の融合から創造へ」少しは貢献できたのではないかと自画自賛していますが、皆様はどのようにお感じになられたでしょうか？学術集会に参加いただいた皆様やご支援いただいた皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

第7回日本腫瘍循環器学会学術集会 会長
南 博信

(神戸大学大学院医学研究科腫瘍・血液内科)



● 学会報告【総務】 ●

2025年度(第8期) 定時社員総会兼評議員会議事録

開催日時 2024年10月10日(木) 18時00分～18時55分

会場 WEB開催 (Zoom)

出席者社員数 総社員数807名、出席社員数543名(内訳 本人出席81名、委任状出席462名)

議長 代表理事 南 博信

議題:

第1号議案:2024年度事業報告ならびに会計報告

第2号議案:2025年度事業計画(活動計画、予算計画)

第3号議案:定款の改定

報告1:今後の学術集会 第8回、第9回

議事の経過及びその結果

定刻、代表理事が議長となり開会を宣した。本社員総会は定款第19条に定める定足数を満たしており、適法に成立した旨を告げ、本会議の議事録署名人に幹事の赤澤評議員を選任し次の議題に入った。

1. 2024年度活動報告、会計報告について

(1) 活動報告

議長より、学術集会、定時理事会開催、会報作成について報告した。

(2) 会員数

議長より、2024年8月31日時点での登録会員数について報告した。

(3) 会計報告

田村財務委員長より、2024年度の会計報告が行われ、石岡監事、斎藤監事の確認を得ていることを報告。本議案は承認された。

2. 2025年度事業計画(活動計画、予算計画)について

(1) 全体スケジュール

議長より、全体スケジュールについて報告された。

(2) 予算案について

田村財務委員長より、2025年度予算案を示して賛否を諮った。別段の異議なく本議案は承認された。

3. 定款の改定について

理事会では意義なく承認された「定款 第22条(役員の設置) 3」の「理事のうち1名を副理事長」を「理事のうち2名以内を副理事長」とする改定案が提案され、別段の異議なく承認された。

4. 各種委員会報告

(1) 総務委員会(岡委員長)

小室賞の創設および、内規(案)について理事会で提案した。総務委員会規則修正案が提出され理事会で承認を得た。各賞の規約、ファイザー助成金「静脈血栓塞栓症の適切な診断および治療推進のための教育」、評議員の推薦、GCOS2027誘致、第9回学術集会(JOCS2026)の会長について報告した。

(2) 学術委員会(辻田委員長)

学術集会のプログラム委員会の設立、学会誌の刊行について理事会で提案した。学術委員会規則修正案が提出され理事会で承認を得た。腫瘍循環器の診療調査の実施、学術活動に対する支援について報告した。



- (3) 広報委員会（南野委員長欠席により南理事長）
会報の記事依頼の実施ならびに編集フロー、ホームページ英語版について学会に予算申請すること、
“腫瘍循環器の広場”との共同での調査について報告した。
 - (4) 国際交流委員会（佐瀬委員長）
8月に行われた委員会、「IC-OS Japan Chapter」の運営開始について報告した。
 - (5) 国内交流委員会（向井委員長）
2024年度の事業報告と2025年度の事業予定について報告した。共催企画を施行した学会の一覧
が提出された。
 - (6) ガイドライン作成委員会（矢野委員長欠席により田村幹事）
ガイドライン作成委員会規則修正案が提出され理事会で承認を得た。Onco-Cardiologyガイドライ
ンの振り返り、ガイドラインの改訂またはupdateについて報告した。
 - (7) 教育研修委員会（泉委員長欠席により田尻幹事）
患者向けポスターの完成、ICOS Japan Chapter webinar、ファイザー公募型教育プロジェクト、教
育webinar、第7回腫瘍循環器学会学術集会においての教育セッションについて報告した。
 - (8) 男女共同参画委員会（坂東委員長）
委員会名変更案として「ダイバーシティ推進委員会」または「ダイバーシティ&インクルージョン推進
委員会」、学会参加における託児補助制度の検討について理事会で提案した。
 - (9) 保険委員会（保田委員長）
委員会専用のWeb会議用アカウントについて理事会で申請した。保険委員会主催市民公開講座の開
催計画について理事会で提案した。ダルテパリンとデクスラゾキサンの公知申請進捗状況について報
告した。
 - (10) 財務委員会（田村委員長）
特段の報告は無し。
 - (11) 医療倫理委員会（木村委員長）
特段の報告は無し。
 - (12) 利益相反委員会（竹石委員長）
特段の報告は無し。
 - (13) 編集委員会（照井委員長）
特段の報告は無し。
5. 今後の学術集会
- (1) 第8回学術集会（向井幹夫会長）
向井第8回学術集会会長より、2025年10月25日、26日に千里ライフサイエンスセンターにて開催
される第8回学術集会について報告。テーマは「不易流行ーがんと循環器：古くて新しい関係ー」。
 - (2) 第9回学術集会
順天堂大学大学院医学研究科教授（併任）の佐瀬一洋副理事長・評議員が、2026年開催の第9回
学術集会の会長に選任されたことが報告された。

● 学会報告 ●

第7回日本腫瘍循環器学会を終えて

2024年8月3日～4日、アクリエ姫路にて第7回日本腫瘍循環器学会が開催されました。本学会では、NEJM誌にて世界で初めて免疫チェックポイント阻害薬(ICI)関連心筋炎を報告されたUCSFのJavid Moslehi先生を招聘し、国内外の関係者が注目する中、貴重なご講演をいただきました。

学会に先立ち、私はMoslehi先生を京都にてお迎えする機会をいただきました。当日は京都で40度の最高気温を記録し、朝から強烈な暑さに見舞われました。先生は半袖短パン・サンダルにサングラス姿という軽装でホテルに現れ、快活な笑顔でご挨拶くださったのが印象的でした。「日焼けすると皮膚科医の妻に怒られるんだ」と冗談を交えながら、私が差し出した日焼け止めを熱心に塗る様子に、親しみやすいお人柄を感じました。

道中では、Moslehi先生の研究室でのICI関連心筋炎に関する最新の知見やトランスレーショナルリサーチ(TR)についてお話を伺い、世界を牽引する研究者としての鋭い洞察と探究心に深く感銘を受けました。その後、姫路へ移動し、ASCOがんサバイバーシップ委員長であり、GCOS2024主催者でもあるAnne Blaes先生とともに学会会場へご案内しました。

学会前夜には、がんプロセミナーとしてICI関連心筋炎に関する症例ディスカッションが行われ、Moslehi先生より本疾患のメカニズムや、リバーSTRの重要性について大きなスケールのご講演をいただきました。現地オンラインとともに多くの参加者が集まり、全国の循環器医、腫瘍医にとって実りある学びの場となりました。自身の研究に協力した患者さんへの謝辞を述べられる姿には、臨床医としての誠実さと深い人間性を感じました。

また、Blaes先生からは、がんサバイバーの心血管フォローアップに関するエビデンスギャップを含む問題提起があり、また多職種連携セッションでは、腫瘍医との対話やコメディカルによる啓発の工夫が紹介されました。ICI関連心筋炎の認知が進む中で、難治症例の治療戦略やリスク層別化に向けた議論が深まりつつあることを実感しました。

本学会は、多くの国内の医師、メディカルスタッフが腫瘍循環器の重要性を改めて肌で感じ、それぞれの日常臨床に活かせる知識を共有する、まさに学際領域の交流の場となったことと思います。

最後に、本学会の開催にご尽力された会長の南博信先生、Moslehi先生のアテンドをお任せくださった学会理事の佐瀬一洋先生をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。



写真1：左からJavid Moslehi先生、田尻和子先生(国立がん研究センター東病院)、今岡。猛暑の京都にて



写真2：壇上でご挨拶されるAnne Blaes先生

執筆者：今岡 拓郎

国立がん研究センター東病院 循環器科
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
国立がん研究センター東病院
TEL: 047-133-1111
E-mail: timaoka@east.ncc.go.jp

● 学会報告 ●

GCOS2024@Minneapolis

2024年9月22日から24日に米国ミネソタ州ミネアポリスで開催されたGlobal Cardio-Oncology Summit (GCOS 2024)に参加しました。本サミットは、腫瘍循環器学を支える世界中の医療者・研究者が一堂に会する貴重な機会で、免疫チェックポイント阻害薬による心筋炎の早期診断、AIを活用した画像診断の可能性など、最先端の知見が数多く紹介されました。本会前日にはResearch SymposiumとNurses Symposiumが開催され、また、世界各国のチームがクイズ形式で知識を競うIC-OS Champions Leagueなどもあり、多職種や参加者同士の交流を深める工夫が随所に見られた点も非常に印象的でした。日本からも腫瘍循環器学を牽引する多くの先生方が参加され、国内外の垣根を越えた交流が実現していました。こうしたサミットに参加することで、日本国内の施設同士も連携して海外勢に引けを取らない質の高い発表を継続していくことの重要性を改めて感じました。私は新規のがん治療薬によると考えられた心不全の1例をポスター形式で発表し、海外の参加者からも積極的な質問やコメントをいただきました。自身の臨床経験について、言語や文化の壁を越えて関心を持って頂けたことはとても大きな励みとなりました。

余談ですが滞在中にはミネアポリス名物のJucy (Juicyではなく) Lucyも体験しました。パティの中にチーズを詰め込んだ点が特徴的で、名前の通りジューシーにあふれ出すチーズと油で揚げ焼きにされた香ばしいバンズがこのJucy Lucyを世界最高のハンバーガーに昇華させていました(図1)。お立ち寄りの際にはぜひ体験していただきたいのですが、市街地から少し離れたところに店舗があるため移動にはバスかトラムが必要です。トラムの場合はそうでもないのですが、バスで移動する場合は移動距離に比例してダウンタウンの雰囲気徐徐に色濃くなり、日本ではあまり体験できないような独特な緊張感を味わうことができます。幸いトラブルはなかったのですが、特に自分にはメガネ・華奢・アジア人のトリプルリーチがかかっていたため、今こうして日本でレポートを記載できることに感謝する必要があるのかも知れませんが、そうした経験も含めてとても貴重な機会を頂けたと感じています。

最後になりましたが、本サミットを通じて腫瘍循環器学ががん診療の質を高めるための重要な柱であることを再認識するとともに、国際的な視野を持って診療・研究に取り組むことの大切さを実感しました。今年はケープタウンでの開催が予定されています。私は今年のサミットに参加できないのですが、今後もこの分野の発展に貢献できればと思う次第です。

執筆者: 松居 一悠

埼玉県立がんセンター 総合内科

〒362-0806 埼玉県北足立郡伊奈町小室780

TEL: 048-722-1111



(図1)



● 学会報告 ●

ESC Cardio-Oncology 2025を終えて

欧州心臓病学会 (ESC) が今回初めて腫瘍循環器の部会を企画し、「第1回 ESC Cardio-Oncology」が2025年6月20日～21日の2日間、イタリア・フィレンツェにて開催されました。

ちょうど夏至にあたるフィレンツェでは、日没が21時近くまで延び、学会後に外に出るとなお太陽が煌々と照っており、まるで腫瘍循環器領域のこれからを明るく照らしているかのような、そんなフィレンツェの夜でありました。

本会には世界79カ国から880名が参加し、2022年ESC腫瘍循環器ガイドラインの策定を主導されたAlexander Lyon先生のOpening remarksからすでに会場は立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。会場の熱気は非常に高く、今後の本領域に対する期待の大きさを実感しました。

参加者の構成を見ると、参加者の半数以上が女性、50歳未満が60%以上を占めており、会場ではSNS (XやFacebook等) を通じたリアルタイムでの情報共有や発表内容の発信が活発に行われていました。こうしたグローバルで柔軟な発信姿勢は、今後の日本の学術集会のあり方としても参考になる部分が多くありました。

学会はYIA (Young Investigator Award)、Clinical Case、ポスターセッションなど複数の会場で同時進行となっており、日本からも複数の演題が発表されました。どのセッションでも質疑応答が活発に行われ、参加者同士の積極的な意見交換が印象的でした。

メイン会場では、CTR-CVT、血栓症、高血圧、不整脈などの病態別セッションに加え、がん患者に対する虚血性心疾患への血行再建を巡るプロコンディベートや症例検討なども行われ、Patient-centered care や Shared decision-making に基づく腫瘍循環器診療の理想像を模索する教育的かつ実践的な構成となっていました。

なかでも印象的だったのは、「Virtual guidelines task force」と題されたセッションで、たとえばSGLT2阻害薬のがん治療関連心機能障害(CTRCD)における推奨度を聴衆参加型のアプリ投票形式で議論するなど、現場感に富んだ熱量の高いディスカッションが行われました。経済状況や医療リソース、循環器・がん診療体制の違いを超えて、共通の課題に向けて国際的に知見を共有し合える貴重な機会となりました。

また、本会のなかで大きなトピックとして発表されたのが、ESCの学術誌「European Heart Journal (EHJ)」の姉妹誌として、2026年に『EHJ Cardio-Oncology』が創刊されるというニュースです。臨床研究やトランスレーショナルリサーチを含め、腫瘍循環器は極めて広範な研究対象を有しており、今後ますます学術的・臨床的な関心が高まっていくことが期待されます。次回のESC Cardio-Oncologyは2026年6月にオーストリアのウィーンでの開催が予定されており、腫瘍循環器の発展とともに今年以上に盛り上がっていくことと思います。



写真1：メイン会場の様子。常に満員御礼。



写真2：日本人参加者と海外の先生方とのディナー
(右から3番目が筆者)



写真3：Oslo大学(Norway)のMarie Stugaard先生(左後列1番目)、Sebastian Imre Sarvari先生(左後列2番目)

執筆者：今岡 拓郎

国立がん研究センター東病院 循環器科
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1

国立がん研究センター東病院

TEL: 047-133-1111

E-mail: timaoka@east.ncc.go.jp

● 学会報告【国内交流】 ●

腫瘍循環器学的重要性と実態： 小室班研究を踏まえて —日本臨床腫瘍学会2025 特別企画報告—

2025年3月6日～8日に神戸で開催された第22回日本臨床腫瘍学会学術集会（JSMO2025）では、がん治療と心血管合併症に関連するセッションが複数企画され、腫瘍循環器学への関心の高まりが随所に感じられた。

中でも注目を集めたのが、7日に実施された特別企画「腫瘍循環器学的重要性と実態：小室班研究を踏まえて」である。本セッションは、腫瘍循環器学会の初代理事長・小室一成先生（国際医療福祉大学循環器内科医）と現理事長・南博信先生（神戸大学腫瘍内科医）が揃って登壇する象徴的な機会となった。南先生は「がん薬物治療における循環器学的重要性」と題して登壇し、がん薬物療法における心血管毒性への配慮が治療成績や患者のQOLに直結することを指摘。心機能低下や血栓症、不整脈、心筋炎など多彩な心血管毒性の予防や早期発見を念頭に置いた治療設計と、循環器医との連携体制の必要性が強調された。続いて小室先生より、厚生労働科学研究費補助金（いわゆる「小室班」）による全国調査の結果が報告された。がんセンター、大学病院、がん診療連携拠点病院等を対象とした本調査では、心血管毒性への対応体制の不均一さ、診療科間の連携の課題、心機能モニタリングの標準化の遅れといった実態が示された。多くの参加者を集めた本セッションは、腫瘍循環器学に対する関心の高さと、臨床現場でのニーズの大きさが実感された。

さらに6日には、JSMO・日本循環器学会・腫瘍循環器学会三学会による合同シンポジウム「がん診療における循環器医に相談するタイミングとその後のフォローアップ」が開催された（司会：田辺裕子先生〔虎の門病院〕、福本義弘先生〔久留米大学〕）。本セッションには腫瘍内科、循環器内科、外科など多様な専門領域の医師が登壇し、がん診療における

循環器的視点の共有と多職種連携の必要性が改めて確認された。「循環器医にいつ相談すべきか」「その後のフォローアップをどう設計すべきか」といった臨床現場に直結するテーマに対し、診療科を越えた視点での議論が行われたことは意義深いものだった。こうした三学会連携による取り組みは、2026年も継続が予定されており、今後の学術的・臨床的発展に向けた基盤となる。

これらのセッションを通じて、腫瘍循環器学はもはや副作用管理の範疇にとどまらず、がん治療の質と安全性を支える中核的専門領域として確かな存在感を示しつつある。今後は、診療フローの標準化、教育体制の整備、多施設でのデータ蓄積といった課題への取り組みが求められる。本学会での議論を契機として、腫瘍循環器学のさらなる実装と普及が進むことを期待したい。

執筆者：今村 善宣

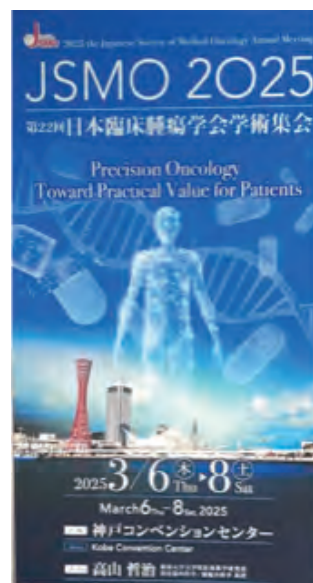
福井大学学術研究院医学系部門（附属病院部）

がん診療推進センター 副センター長

〒910-1193 福井県永平寺町松岡下合月23-3

TEL: 0776-61-3111 FAX: 0776-61-8656

E-mail: yimamura@u-fukui.ac.jp



図：JSMO2025

施設紹介

No.6

新潟県立がんセンター新潟病院 腫瘍循環器科の紹介

腫瘍循環器科をはじめて7年たちました

当院は新潟市中心部、信濃川左岸にある367床の都道府県がん診療連携拠点病院です。田中洋史院長のリーダーシップの下、「誰一人取り残さないがん対策を推進し、すべての国民とがんの克服を目指す」ことに取り組んでいます。

私は2008年に当院に赴任しました。当時は分子標的薬による治療が本格化し、予後が改善して患者さんががんと共に生きる時代の到来を実感しました。循環器の併存症や薬物療法の有害事象を管理する役割を担い今に至りますが、プレジジョンメディスンや免疫療法が脚光を浴びる一方で、腫瘍循環器への関心は当地では低く、寂しい限りでした。そんな中、小室一成先生や向井幹夫先生にOnco-Cardiology Meetingへ誘っていただき、勇気と確信を得ることができました。そして、先駆者に倣い2018年に腫瘍循環器科を立ち上げました。2023年にがんと循環器病対策の基本計画に「腫瘍循環器」が明記され、ガイドラインが公表されてようやく当科も市民権を得たように感じます。常勤医は私一人ですが、当院は大学病院から車で10分と近く、医師の出張や重症患者の受け入れなど、大学との連携体制に支えられています。

当科の取り組みを3つで紹介します。1つめはアントラサイクリン心筋症の早期発見です。年1回のBNP測定を半年ごとに担当医に呼びかけています。実施状況を一覧にして担当医に渡すだけで強制力はありませんが、1年以内のスクリーニング実施率は4年前の40%から現在は73%に上昇しました。心不全患者は増えましたが、入院は大幅に減少しています。

2つめは免疫チェックポイント阻害薬（ICIs）関連心筋炎の早期発見です。患者さんの急死を契機に、2023年からトロポニン（cTn）によるスクリーニングを導入しました。ICIs開始後3か月間は月1回検査を実施しています。実施率は92%に達していますが、治療前から患者さんの1.4%にcTnの上昇が認められ、治療開始後は7.3%に増加します。

心筋炎はその一部に過ぎませんが、主治医と連携しつつ慎重にフォローしています。

3つめが、腫瘍循環器診療の普及活動です。推進にあたっては、循環器内科だけでなく、腫瘍を担当する診療科との連携が不可欠と考え、2020年に南野徹先生および西條康夫先生により新潟腫瘍循環器協議会（OCAN2020）が設立されました。当科はその事務局を務めています。猪又孝元先生は、県内の各分野のリーダーに呼びかけ、ICIs関連心筋炎への対応体制を構築しました。マニュアルを作成し、2023年1月には県内に350部を無償配布しました。この取り組みは、同年末の患者救命に貢献しました。詳細は「腫瘍循環器の広場」のWebサイトに掲載されておりますので、ご参照ください。また、協議会では、県内の病院における院内連携の実態調査を実施し、連携体制の改善に取り組んでいます。本調査結果はCirculation Reports誌にも掲載されておりますので、ぜひご一読ください。

当院は、県内で唯一のがんセンターとして、地域医療の模範となることが期待されています。腫瘍循環器科は後発の診療科ですが、他の専門職と積極的に連携し、臆せず意見を求め、業務を依頼し、問題提起を重ねてきました。設立から7年が経ち、データや経験は少しずつ蓄積されていますが、その分析には日々苦心しています。当院の使命を胸に、地道な努力を重ねながら、支えてくださるスタッフへの感謝を忘れず、一步一步前に進んでいます。今後とも、全国の先生方のご指導とご支援を賜れましたら有難く存じます。



大倉 裕二

新潟県立がんセンター新潟病院 腫瘍循環器科

新潟市中央区川岸町2丁目15-3

TEL: 025-266-5111 FAX: 025-233-3849

E-mail: okuray@niigata-cc.jp

● 役員名簿 ●

理事長	南 博信	(神戸大学大学院医学研究科)
副理事長	佐瀬 一洋	(順天堂大学大学院医学研究科)
理事	阿古 潤哉	(北里大学医学部)
	安斉 俊久	(北海道大学大学院医学研究院)
	家田 真樹	(慶應義塾大学医学部)
	池田 正孝	(兵庫医科大学)
	石坂 信和	(社会福祉法人同愛記念病院)
	泉 知里	(国立循環器病研究センター)
	大須賀 穰	(帝京大学産婦人科)
	岡 亨	(埼玉県立がんセンター)
	絹川 弘一郎	(富山大学大学院医学薬学研究部)
	木村 晋也	(佐賀大学医学部)
	桑原 宏一郎	(信州大学医学部)
	坂田 泰史	(大阪大学大学院医学系研究科)
	笹野 哲郎	(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科)
	佐田 政隆	(徳島大学大学院医歯薬学研究部 循環器内科学分野)
	清水 千佳子	(国立国際医療研究センター)
	竹石 恭知	(福島県立医科大学)
	田村 研治	(島根大学医学部附属病院)
	辻田 賢一	(熊本大学大学院生命科学研究部)
	照井 康仁	(埼玉医科大学)
	中村 真潮	(陽だまりの丘なかむら内科)
	野出 孝一	(佐賀大学医学部)
	坂東 泰子	(三重大学大学院医学系研究科)
	平田 健一	(加古川中央市民病院)
	三谷 絹子	(獨協医科大学)
	南野 徹	(順天堂大学大学院医学研究科)
	向井 幹夫	(大阪がん循環器病予防センター)
	保田 知生	(CVLアトラ新町クリニック)
	矢野 真吾	(東京慈恵会医科大学)
監事	石岡 千加史	(JR仙台病院)
	斎藤 能彦	(奈良県立病院機構奈良県西和 医療センター)
幹事	赤澤 宏	(東京大学大学院医学系研究科)
	高橋 雅信	(東北大学加齢医学研究所 臨床 腫瘍学分野)
	田尻 和子	(国立がん研究センター東病院)

● 編集後記 ●

私が外科医としてのキャリアをスタートした30年ちょっと前は、がん薬物療法はsurgical oncologistの仕事とする施設が多数派でしたが、時を経て欧米並みに主にmedical oncologistの仕事として定着してきました。Medical oncologistはがん薬物療法における副作用マネージメントも行いますが、昨今の多くの新規薬剤の開発に伴い、副作用も複雑化・多様化しており、今ではそれぞれの副作用に対応可能な専門性を持つ診療科や職種との横断的連携が不可欠となりました。本学会はまさにがん治療における循環器のサポーターとして設立されました。

私は以前、日本がんサポーターブケア学会学術集会を主催する機会をいただいた時に、会長企画として本学会とのサステナブルな連携を目指した合同シンポジウムを実施したいとの強い思いがあったことから、小室一成先生(当時の本学会理事長)に直談判したところ、二つ返事でご了承いただき向井幹夫先生(本学術集会次期会長)をご紹介いただきました。その後も両学会の友好的連携が継続されていると確信しています。

縦割りの分厚い診療科の壁の中でスタートした自身のがん治療医としてのキャリアの中で、がん治療とは直接的な関わりが薄いと考えていた循環器の先生、その他の診療科の先生、コメディカルの方々と同じ目標に向かって垣根を超えた医療を行う時代が来るとは想像していませんでしたが、今では当たり前になりつつある診療科・職種横断的な医療が、効率的な患者ファーストのがん治療の実践にいかに直結しているかを痛感しています。

仕事でもプライベートでも世の中には様々な壁があります。なくてはならない壁はありますが、よく見ると役割のない壁、存在することが逆に害となっている壁。皆さんも一度身の回りの壁を見渡してみたいはいかがでしょうか。

広報委員 宇和川 匡



日本腫瘍循環器学会 会報

(年1回刊行)

第6号 (2025年7月)

発行 / 一般社団法人 日本腫瘍循環器学会

編集 / 一般社団法人 日本腫瘍循環器学会事務局
(一般社団法人 学会支援機構)

● 入会案内 ●

正会員：この法人の目的に賛同して入会した個人
または団体（年会費：8,000 円）

賛助会員：この法人の目的に賛同し、この法人を
資金的に援助する個人および団体（年会費：1 口
50,000 円 口数に制限はありません）